

THE GALLERY



アリオス×市立美術館連携事業

眼差しの先で

美術館では色々な視線が飛び交っています。まず鑑賞者の視線。それから、作品の人物像の視線がどうしても気になることがあります。ただの絵や彫刻なのに不思議ですね。作家が対象に向ける視線も、作品を通して私たちは追体験しています。展示室の監視員は、鑑賞の邪魔にならぬよう見えないように視線を送っています。あるいは鑑賞者であるあなたは、気が付かないうちにその後ろの鑑賞者に見られています。

体育館やホールの舞台上に立つと、大勢の視線を浴びて自分が自分でないような感覚になり、視線の持つエネルギーの大きさに気が付きます。逆にあくまで見る側であるはずの客席も、舞台からよく見えます。全ての客席が舞台の方を向いているので当然なのですが、寝ている人は勿論、退屈か感動しているのかも、実は割と見えています。その意味で舞台は、何気なくやっている「見る」「見られる」という行為を拡大、浮き彫りにする装置のようです。

視覚芸術を主とする美術館と、ホール系の事業を主とするいわきアリオス、双方の特色を落とし込めないか。

「パナソニック汐留美術館所蔵 ジョルジュ・ルオー展」関連企画として行われたいわきアリオスとの連携事業は、そんな担当の思惑とともに始まり、演出家の小野寺修二さんと打ち合わせの中で「芸術を鑑賞する場における視線そのもの」というサブテーマに辿り着きました。

公募で集まった参加者とともにまずはジョルジュ・ルオー展を鑑賞。さらに、ルオーが書き残した言葉を頼りに、彼の生き様や芸術に対する姿勢をくみ取っていきます。ルオーは道化師や踊り子、裁判官、聖書の風景などを独特の雰囲気で描きました。何故道化師は静かに目を閉じているのか？といった疑問を通して画家が描く対象に向ける視線を追体験しつつ、そこから具体的な見る・見られる動作に移し替えていく作業が、小野寺さん先導のもと行われました。最後は美術館のロビー等を使っての発表。ちょっとあいまい、でも深いテーマを投げかけられた参加者の皆さんが、全身で考えてやり切った！という顔をしていたのが印象的でした。異なる分野がぶつかって起こる湧昇流とでも言うべき豊かな時間が流れ、担当もほっとしています。 (学芸員 太田紋乃)

3月17日(火)～5月17日(日) 会場 美術館1階ロビー 観覧無料

「オリンピックポスター」というと、大会のエンブレムやロゴをあしらった「公式ポスター」を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。実は、それだけではありません。重要な文化プログラムの一環として、アーティストによる「アートポスター」なるものが制作されているのです。さらには開催地の文化を紹介するために「カルチャーポスター」が制作されることもあります。



ロイ・リクテンスタイン
《1984年ロサンゼルスオリンピック競技大会》
1982年
© Estate of Roy Lichtenstein, New York & JASPAR, Tokyo, 2020 C3201

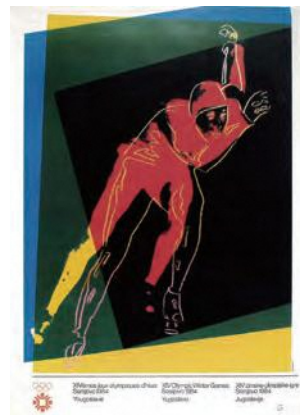
本展覧会では、当館で所蔵する1972年ミュンヘン大会、1984年ロサンゼルス大会、1984年サラエボ大会のアートポスター、1988年ソウル大会のカルチャーポスターの中から計50点余りのポスターを、3つの会期で網羅的に紹介します。ウォーホル、リクテンスタイン、ホックニー、ローゼンクイスト、グレイザーなど、アート&デザイン分野の先駆者たちが目白押しです。さらに第3期（4月28日～）には特別に、市内所蔵者の方からお借りした、デザイナー亀倉雄策による1964年東京大会公式ポスター1号～4号を一挙に展示します。上部に赤い日の丸、その下に金色で五輪シンボルと「TOKYO 1964」の文字を配した1号ポスターは、誰しも一度は見たことがあるかもしれせん。

シンプルにスポーツの一瞬を切り取るポスターから、謎めいていて意味深長なポスターまで、そして具象的なものから抽象的なものまで、アーティストによって異なる多様なアプローチを楽しむことができます。また同時に、ポスターは時代や開催地の雰囲気や反映しています。大会ごとに特有の雰囲気を感じ取っていただけるのではないのでしょうか。

5月2日（土）には、担当学芸員によるスライドトーク「スポーツとアートの意外な関係」を催します。展示しているポスターの解説に加え、オリンピックにおけるポスター制作の歴史を振り返ります。文化・芸術の祭典として、オリンピックがいかに役割を果たしてきたか、紹介できればと思います。（学芸員 徳永祐樹）



ヴィクトル・ヴァザール
《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》1970年
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2020 C3201



アンディ・ウォーホル
《スピードスケーター》（サラエボオリンピック・アートポスター）1983年
© 2020 The Andy Warhol Foundation for the Visual Arts, Inc. / Licensed by ARS, New York & JASPAR, Tokyo C3201

4月11日(土)～5月24日(日)

ストラスブールはフランス北東部、ドイツとの国境近くに位置しており、古くからヨーロッパの交通の要衝と



クロード・モネ《ひなげしの咲く麦畑》1890年頃



マリー・ローランサン《マリー・ドルモワの肖像》1949年

Musée d'Art Moderne et Contemporain de Strasbourg, Photo©Musées de Strasbourg.

して栄えてきました。歴史的、文化的にも豊かな背景を持っていて、市内には10の博物館、美術館が存在します。

「ストラスブール美術館展—印象派からモダンアートへの眺望—」では、そのうちの一つ、ストラスブール近現代美術館の収蔵品を中心とした約90点の絵画作品によって、19世紀から20世紀にかけての西洋近現代美術の流れを展覧します。

会場は3章構成になっています。第一章は近代美術を語る上で欠かせない「風景」をメインに、第二章は人物を対象とした様々な試みを、第三章は「アヴァン＝ギャルド（前衛芸術）」をテーマにキュビズム、抽象絵画、シュルレアリスムの作品を展示します。

展示会のキャッチコピー、「旅するように、絵画を見る」には、二つの狙いを込めています。一つは、大きな時間の流れを体感して欲しいということ。展示はほぼ制作年順に構成しますが、1829年制作のテオドール・ルソー《岩と木の習作》から、1983年制作のA. R. ペンク《ストロング・ポイント》（「聖なる土地への旅」より）まで、時間の幅は約150年。その間の主要な美術のムーブメントは網羅していますから、どんと大きく構えて、歴史のコマを進めるような感覚で展示室を歩いてみると、全体の流れが見えてより深く楽しめるでしょう。もう一つは、

まだ見ぬ新しい景色に出会って欲しいということ。今回は実に66人もの作家を取り上げますので、その中から一人でも新しく「気になる人」を見つけていただければ幸いです。

会期中には、本展示会カタログでご執筆いただいた富田章氏（東京ステーションギャラリー館長）による講演会、いわき交響楽団によるロビーコンサートを行うほか、担当学芸員によるスライドトークや展示室内でのギャラリートークも予定しています。傑作ぞろいの展示会、皆様のお越しをお待ちしております。（学芸員 太田紋乃）

企画展紹介 Next World—夢みるチカラ タグチ・アートコレクション×いわき市立美術館

6月4日(木)～7月5日(日)

企画展「Next World—夢みるチカラ」は、日本をはじめ、国境を越えたグローバルな視点で選抜された国内有数の現代美術コレクション「タグチ・アートコレクション」と、1984年の開館以来、国内外の優れた戦後の美術を収集の柱としてきたいわき市立美術館のコレクションとのコラボレーションで、より幅広く現代の美術の魅力を紹介する展示会です。

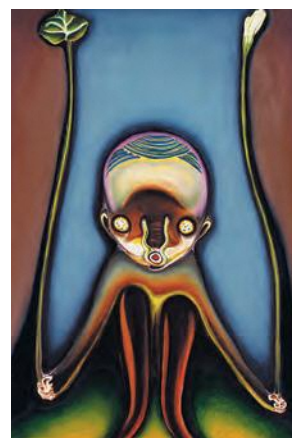
実業家でありコレクターとして知られる田口弘氏とその長女美和氏の親子二代による現在進行形のタグチ・アートコレクション。現在、その数は約500点にも及ぼうとしています。田口氏は、現代社会と人間の問題について常に新しい表現を模索する美術のパワーを、第4次産業革命を前に新しい発想が求められるイマを生きる若者たちへのエールとして公開しています。今回の展示会では、このタグチ・アートコレクション83点にいわき市立美術館収蔵品29点を加えた112点の作品により構成されます。展示場に集った作品たちは、日本をはじめアジア、ヨーロッパ各国、北米、南米、アフリカにおよぶ地球的な広がり、1959年制作の《新聞雑報》（ピエール・アレシンスキー作、いわき市立美術館蔵）から2018年～2019年制作の《Natasa》（グザヴィエ・ヴェイヤン作、タグチ・アートコレクション）におよぶ60年間の時間の流れをもって、現代美術の鼓動とその多様さをダイナミックに体现します。絵画や彫刻、映像作品、インスタレーション的な作品、そして鑑賞者の参加を求める作品など、展示作品たちの前を一巡りすれば、その1点1点の作品が、そしてそれらの作品を制作した一人ひとり

の作家の思いが、私たちが美術が指し示す次なる世界へと誘います。

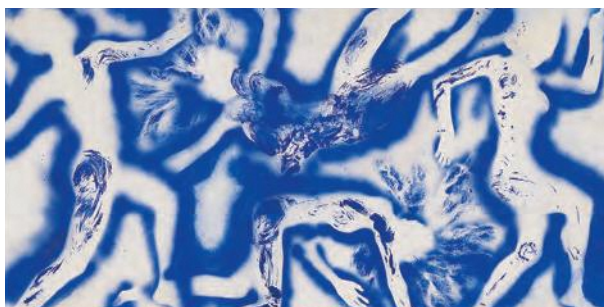
タグチ・アートコレクションといわき市立美術館、そして会場にお越しいただいた鑑賞者の皆さんによる、現代美術 最強のコラボ！ 会場に巻き起こる様々なコミュニケーションを楽しみながら、新しい時代にこそふさわしい美術の魅力、美術のチカラを発見する絶好の機会となる「Next World—夢みるチカラ」をお見逃しなく！
（普及係長 植田玲子）



名和晃平
《PixCell-Deer #51》2018年
Courtesy of SCAI THE BATHHOUSE
photo:Nobutada OMOTE | SANDWICH



加藤 泉
《無題 2009》2009年
© 2009 Izumi kato,
Courtesy of the Artist タグチ・アート
コレクション



イヴ・クライン《人体測定 ANT66》1960年いわき市立美術館蔵

出品作家（アルファベット順）

会田 誠、ピエール・アレシンスキー、ホルスト・アンテス、カレル・アペル、荒木高子、ミリアム・カーン、マウリツィオ・カテラン、ルー・チャオ、ナイジェル・コーク、セバスチャン・ディアズ・モラレス、エルムグリーン&ドラグセット、モリーン・ギャレス、ローラン・グラッソ、潘 逸舟、キース・ヘリング、ジェフリー・ヘンドリックス、ダミアン・ハースト、デイヴィッド・ホックニー、イケムラレイコ、ジョアン・グスマン&ベドロ・バイヴァ、加藤 泉、川俣 正、川島秀明、イヴ・クライン、小泉明郎、アブドラエ・コナーテ、鴻池朋子、草間彌生、ロイ・リキテンスタイン、丸山直文、ロベルト・マッタ、アダム・マクウェン、ヨナタン・メーゼ、ジョナサン・モンク、リチャード・モス、ヴィック・ムニーズ、村上 隆、奈良美智、名和晃平、西村 有、ハンス・オブ・デア・ピーク、ジュリアン・オビー、ローラ・プロヴォスト、ロブ・プリット、ゲド・クイン、ジェームズ・ローゼンクイスト、坂本和也、ウイリアム・サスナル、佐藤時啓、さわひらさ、澤田知子、塩田千春、アンジ・スミス、杉本博司、杉戸 洋、鈴木ヒラク、田名網敬一、ロデル・タバヤ、照屋勇賢、スーメイ・ツェ、グザヴィエ・ヴェイヤン、アンディ・ウォーホル、渡辺 豪、アーウィン・ワーム、山田周平、リネット・ヤドム=ボアキエ

7月18日(土)～8月30日(日)

スウェーデンを代表する陶芸家リサ・ラーソン（1931年生まれ）。23歳という若さで国内最大の陶芸制作会社・グスタフスベリ社に迎えられ、26年間の在籍中に約320種類もの作品を制作、スウェーデンを代表する人気作家となりました。その後はフリーのデザイナーとして海外でも活躍し、2020年、89歳を迎えた現在も、芸術一家という創造的な環境の中で、自分のペースで楽しみながらユニークピース（一点もの作品）を制作し続けています。

北欧の豊かな自然の中で創作された、猫やライオンなどの動物や子どもをモチーフにした素朴で温かみのある作品は、世界中の多くのファンを魅了しています。日本では赤と白のシマシマ模様が特徴的な猫「マイキー」の生みの親としても知られています。

本展ではリサ・ラーソンが創作において影響を受けた諸文化や作家たちとの出会いと、そこで培われた彼女の想像豊かな作品をご紹介します。初期から近年に至る作品約200点の他、北欧を代表するデザイナー スティグ・リンドベリをはじめとする作家たちの作品約20点を展示



リサ・ラーソン
《ライオン (マキシ) / アフリカシリーズ》製造1968年—
© Lias Larson / Alvaro Campo

します。彼女の創作の旅路をたどり、やさしさあふれる作品の魅力に迫ります。（主任学芸員 江尻英貴）

裏方だより 新型コロナウイルスに翻弄された「市美展」

9年前の3月11日、開幕したばかりの「第40回いわき市美展 書の部」が東日本大震災によって中断延期を余儀なくされましたが、そのことを否応なく思い出させられる事態が、まともや市美展を襲いました。「第49回いわき市美展 陶芸の部、写真の部」の表彰式前夜に、新型コロナウイルス感染者がいわき市内で確認され、急遽、予定されていた表彰式やイベントをすべて中止せざるをえなくなるという事態に陥ったのです。

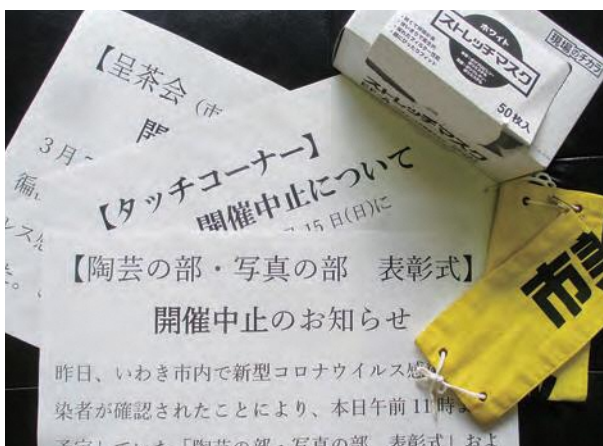
「陶芸の部、写真の部」の会期が、全国的な感染拡大と重なってしまったため、不特定多数が飲食を共にする「呈茶会（市民のつくった茶碗を使って）」や濃厚接触の

危険性の高い「タッチコーナー」などは、関係者協議の上、泣く泣く中止を決定していましたが、表彰式までとは、よもや受賞者でなくとも落胆は隠せません。

陶芸、写真両部門合わせて38名の晴れの舞台や年に一度の開催を楽しみにしていたイベントが中止になったことを関係者に伝えなければならないのは、何とも切ない作業です。事務室総出で電話をかけ、あきらめの声、落胆の声に耳を傾け、お祝いと慰めの言葉をかけ続けました。

幸い感染経路が明確で濃厚接触者もいないことから展覧会そのものは継続することができ、当日来館された受賞者には、事務室で館長よりお祝いとねぎらいの声をかけつつ賞をお渡しすることが出来ました。数名しかいない事務室スタッフの拍手に「何だか、普段以上に照れますね」と笑顔を見せる受賞者のみなさんが、私たちには大きな慰めでした。

新年度の大規模展覧会準備も大詰めに差し掛かっていますが、いつどうなるかしのれない不安定な状況は、担当学芸員にも大きな負担となつてのしかかっています。9年前、原発事故の余波で準備していた企画展のことがとく中止になった悪夢が繰り返されないことを切に祈りながら、若い学芸スタッフたちの頑張りを頼もしく感じているところです。（学芸員 柴田百合子）



20世紀以降の美術は、それ以前の美術とは大きく異なる様相を呈しています。抽象的な表現の登場がその最たるものであり、絵画においても彫刻においても、人物や静物などを写実的に表現することから遠ざかる美術があらわれました。そしてさらに、対象を抽象的に再現するのではなく、再現すること自体をやめる美術へと発展していきます。やがて絵画においては、何かを描くために色と形を使うのではなく、色あるいは形そのものの性質を用いて描く作品が生まれるに至ったのです。2020年度常設展前期は、「色彩と形態をめぐって」と題し、色や形による絵画空間を構築したさまざまなスタイルの作品にスポットをあてます。

色の明暗や形の規則的な配列などにより錯視効果をもたらす「オプティカル・アート」は、眼という器官を通じわたしたちの知覚にはたらきかける美術として1960年代に注目されるようになりました。ストライプや波状の色面による視覚的作用を追求するブリジット・ライリーも、オプティカル・アーティストの一人です。今回は、D I C川村記念美術館での個展、イギリス国内を巡回した大規模な回顧展へと貸出が続いてい



モーリス・ルイス《Gamma Beta》



中村一美《破庵29(奥聖)》



中村一美《破庵(いわき破庵)》

た代表作《RA》を、久しぶりに展示します。また、「カラーフィールド・ペインティング」は、形にとらわれることのない色彩そのものの美しさをわたしたちに伝えてくれます。カンヴァスに絵具を滲み込ませて彩色するモーリス・ルイスやヘレン・フランケンサラーは、絵具を塗った絵画ではなく、豊かな色彩が広がる空間を完成させたといってよいでしょう。

小企画コーナーでは、昨年度に引き続き「収蔵作家セレクション」を開催します。4月から6月28日までは中村一美を、6月末から10月25日までは、辰野登恵子とイケムラレイコを特集する予定です。1980年代以降、独自の理論によって絵画の可能性を模索し続けてきた中村一美は、日本の現代美術を牽引する重要な作家であり、当館においても個展やグループ展においてその精力的な活動を紹介してきました。今回は10点以上もの絵画に加えて、立体作品《破庵(いわき破庵)》を2002年の個展以来18年ぶりに一階ロビーに展示します。絵画における「三次元的空間の構築」の探求のために作られた立体の《破庵》と、絵画の《破庵29(奥聖)》を同時に見ることのできる絶好の機会となります。なお、《破庵(いわき破庵)》は5月下旬までの約2か月間のみの展示となりますので、お見逃しなく。

(学芸係長 竹内啓子)

コレクション—この1点 高松次郎《点》

この作品に描かれた求心的な動きを示す線の集合は、概念的な点、もしくはそれ以上分割できない物質の最小単位—素粒子であると高松は述べる。しかし勿論、高松は、素粒子の姿を描こうとしているわけではない。この世界を形作る眼に見えないなにかを、数学や量子力学的知見を活用（この科学的、論理的知見を活用する思考の在り方が、影や遠近法を用いる作品シリーズを導く）しながら思考し、視覚化することを試みているのである。

つまり、本作品に現れたカオスの如く渦巻く線の集合は、後に既存の美術の在り方（制度）や事物を認知する仕組みを揺るがし、解体するための一種の視覚装置とみなされる一連の作品シリーズを生み出す起点として生成しつつある世界や事物に対する認識の在り方を巡る生々しい思考の軌跡の具現化と考えられる。

そして平面上に表現された線の集合—点は、すぐに紐を丸めた塊として半立体化し、さらにその塊は立体としてキャンバスを飛び出していくことになる。世界を認識する思考上の核（視座）を示す点は、世界を測るための線分の具体物—紐へと移行し、さらに世界をミキサー（攪拌）する物体として日常へ侵入していくのである。それゆえ本作品を含めた〈点シリーズ〉は、二次元空間に現れた能動的な線の集合が、絵画の枠組みに収まりきらず三次元空間に変位していくアクティブな高松の思考状態を極めてリアルに反映しているとみるべきであろう。

高松没後、大量に残された作品資料の調査が進められた結果、〈点シリーズ〉以前に描かれた未発表の水彩が発見され、その存在が、いまだ評価の定まらぬ晩年に制作された絵画群を照射し始めている。その意味で発見された水彩との関連性を強く示す本作品は、晩年の絵画群の出現を予兆するとともに、高松の作家として



《点》
1961年、油彩、キャンバス、61×42.0cm
© The Estate of Jiro Takamatsu / Courtesy of Yumiko Chiba Associates

の出発点に位置づけされる〈点シリーズ〉を問い直す上で重要な位置を占めている。

さらに加えて言うならば、本作品は、絵画の人たる高松を物語る最初期の作品であろう。

（特任学芸員 平野明彦）

今後の主な展覧会事業のご案内

※都合により、内容等に変更が生じる場合があります。

企画展

- 亀倉、ウォーホル、リクテンスタイン…現代美術のアスリートたち—所蔵オリンピックポスターによる
3月17日(火)～5月17日(日)
- ストラスブール美術館展—印象派からモダンアートへの眺望—
4月11日(土)～5月24日(日)
- タグチ・アートコレクション×いわき市立美術館
Next World—夢みるチカラ
6月4日(木)～7月5日(日)

- リサ・ラーソン展—創作と出会いをめぐる旅—
7月18日(土)～8月30日(日)
- メスキータ展—エッシャーが命懸けで守った男—
9月12日(土)～10月25日(日)
- ニューアートシーン・イン・いわき
小坂橋弘展
9月12日(土)～10月25日(日)
※10月26日(月)～令和3年1月4日(月)
館内メンテナンスのため休館

常設展

- 前期 色彩と形態をめぐって
4月1日(水)～10月25日(日)
〈小企画展示Ⅰ〉収蔵作家セレクションvol.1
中村一美
4月1日(水)～6月28日(日)
〈小企画展示Ⅱ〉収蔵作家セレクションvol. 2
辰野登恵子 イケムラレイコ
6月30日(火)～10月25日(日)